キミの愛馬365

なちょす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うまぴょい♡
うまぽい♡
うまぽいってなんだよ。

目次

夜遅くまで仕事して凄いって？皆帰る中偉いって？よ、よせよチケゾー、俺はただの社畜で？ははっ、おいおい泣くなよ？なぁ、泣くなって⁇うっ⁇ ―― 1

んんｗ拙者、ど根嬢倶楽部会員Ｎｏ．１のサポカクソザコ侍にて候ｗｗｗ特別にキングコールをする権利を進呈するでござるブッフォｗｗｗ ―― 8

Ｄｒｅａｍｅｒ×Ｄｒｅａｍｅｒ（１／２） ―― 16

Ｄｒｅａｍｅｒ×Ｄｒｅａｍｅｒ（２／２） ―― 20

ゴル＆マック～空飛ぶ屋形船と消えた１２０億を追え!!～ ―― 31

夜遅くまで仕事して凄いって？皆帰る中偉いって？よ、よせよチケゾー、俺はただの社畜で？ははっ、おいおい泣くなよ？なぁ、泣くなって??うっ??

ゴールデンウィークが終われば梅雨の入りなどあっという間なもので、夜の帳が降りた街中の河川敷では蛙達が既に合唱を始めている。

５月も後半になった今日この頃、私は家へと帰る為に重たい脚を引きずる様にして歩いていた。４０後半になっても、営業という物は何がどう変わる訳では無い。朝から夕方まで客先へとハシゴしては自身が受け持つ企画のプレゼン。会社に帰ってきてからも企画会議に配下社員の仕事の進捗管理に自身の業務。

仕事が大切だと思っていた。

仕事だけで生きてきた。

それが「普通」なのだと言い聞かせてきた。

好きな事は何かと聞かれれば、沈黙が回答なのが私だった。

中学生にもなる一人娘の学校行事に参加してやれず、家内の小さな我儘も聞いてやれなかった。どうせ忙しいからと言われ続け、いつの間にか家の中には、えもいえぬ距離感で象られた家族が出来上がっていた。例えそれが、私の自業自得なのだとしても、胸に蟠りが残る。

人は、簡単には変わらない。変えることなど出来ない。私の心は、すっかり諦めがついていた。

今日、この日までは。

「うぉおおおお!!もういっぽぉんッ!!」

威勢のいい掛け声と共に、川沿いの道をひた走る一人の少女。赤いジャージに身を包みながら掛けるその姿は、不思議と私の目を引いた。

今となっては知らない人の方が少ない、獣のような耳を生やした少

女。

――――ウマ娘。

誰が最初に呼んだのか、いつしか彼女らの存在は熱狂的な渦となり、多くの人を虜にしてきた。私は??正直、その魅力が分からなかった。娘に何度か映像を見せてもらった。会社の同僚も熱中していた。それでも??私には、分からなかったのである。

何故、そんなに人を引きつけるのか。

何故、愛してやまない人が後を絶たないのか。

練習中だった彼女は、ぼんやりと思考に耽ける私に気付き、声を大にして言った。

「こんばんはー!!」

「あ??あぁ、こんばんは。すまない、ずっと見ていたようだね。」

「いえ、こっちこそこんな夜に大声出してごめんなさい!!」

謝りながらも、彼女の声は大きいままだった。

思わずクスリと、笑いが込み上げる。

「練習の邪魔をしてしまうから、私はこれで失礼するよ。」

「はい!」

結局、この日はこれ以上彼女と話す事は無かった。あの子は練習に戻り、私はいつもの日常に戻る。

考えてみれば、これが初めてだったのだ。

走る事に情熱を燃やすウマ娘との出会いは。

◇◆◇◆◇

翌日から、同じ時間、同じ河川敷で彼女と遭遇した。

いつだって、彼女は走っていた。練習とはいえ、鬼気迫る表情で、何かを追い求める夢旅人の様に。

少しずつ??本当に少しずつだが、私と彼女の会話は増えていった。

時には、タイム計測と言うものに付き添ったりもした。間近で見るウマ娘の走りに驚きながらも、どこか「そうだろうな」と1人納得し、練習に戻る。

時には、彼女を知る事になった（とは言っても、一方的に説明されたのだが）。夜にここを走っているのは自主トレーニングの一環で、オーバーワークし過ぎなければ良いと、彼女の担当をしているトレーナーから了承を得ている事。もうすぐ、彼女が目標とする『日本ダービー』が開催されるという事。それが、ウマ娘にとって一生に一度しか訪れない、夢の舞台である事。

時には、私自身の事を話したりもした。この時間まで仕事に明け暮れている事。家族との関係が上手く作れない事。好きな事も無く、夢も無く、そんなままズルズルと今日まで生きてしまった事。

そんな私の言葉を聞いて、彼女は何度も大泣きをしていた。

正直こちらが少々どうしたものかと困惑するぐらいには、大声で泣かれた。

『おじさんは辛かったんだね』
『おじさん、ずっと頑張ってたんだね』
『おじさんは、本当に凄いんだね』

彼女の涙と共に溢れた言葉の数々は、私にとっては言われた事の無い新鮮なものだった。

そうして、いよいよダービー本番を明日に控えた今日、彼女は私に贈り物をくれた。

「おじさん、これ!!」
「これは???」
「明日のダービーの招待券！トレーナーに、どーーーーしてもお願いって頼んで、今日貰ったんだ！おじさんと、おじさんの奥さんと、おじさんの娘さんの分！」

まるで電車の特急券の様な3枚のチケット。質の良い紙に、光沢のある印刷で『東京優駿』と書かれている。

「アタシ、走るよ。トレーナーと、おじさんと、学園の皆と頑張ってきたこと全部出し切って、絶対誰よりも早くゴールしてみせるから！へへっ??それだけっ！じゃあ、おやすみなさーい!!」

こちらの返答待たずで、彼女は猛スピードで帰ってしまった。
一生に一度の東京優駿――日本ダービー。
私は、見に行ってもいいのだろうか？彼女を、応援してもいいのだろうか？
この短い期間で、ほんの少しだけトレーニングに付き合って、知り合いになっただけなのに。
ウマ娘という少女達のことを、まだ何も分かっていないというのに。
ポケットの中で震えた携帯電話。
明日は日曜日だと言うのに、営業先から急遽会えないかという話であった。
私は、どうすればいいのか――帰路についても、その答えは雲のように掴むことは出来なかった。

◇◆◇◆◇

「本日は、どうもありがとうございました！それでは失礼致します。」
客先の会社から出て、空を見上げる。結局、私はここに居る。ここにしか、居られなかった。
どんよりとした曇り空。
１５時を回り、あの子が出ると言っていたダービーが始まるまであと３０分と言ったところだ。
家に帰り、貰ったチケットを娘と家内に渡した所、大喜びであった。余程大きな大会のようで、１度は生で見てみたかったのだと言う。もう何年も見ていなかった家族の笑顔と温かい空気に包まれながらも、私の心はここに在らずだった。
『これ、誰に貰ったの？関係者のウマ娘って事は、多分出る子だよね！』
喜ぶ娘に問いかけられて、私は初めて自分が大切な事を忘れていたと思い知らされた。
『すまん？名前を聞いていなかった??。』

私の言葉に呆れながらも、娘は部屋に戻る直前、私に言った。

『もう??仕事で忙しいなんて、言っちゃダメだよ。その子は、お父さんに見てもらいたいんだと思うから。その子は、悲しませちゃいけないと思う。』

あの時の娘の顔は、悲しげだった。あの子の思い出のどこにも居られなかった私には、何も言えなかった。そうして、今私はここに居る。仕事に生きて??そうする事でしか、自分を保てなくて。

『アタシ、走るよ。トレーナーと、おじさんと、学園の皆と頑張ってきたこと全部出し切って、絶対誰よりも早くゴールしてみせるから！』

??本当に、そうか？

また、繰り返してしまうのか？私は、変われないのか？

私の為に泣いてくれた彼女に、声援のひとつも送らずに生きていられるのか？

「15分。電車もバスも乗ってる暇は――――無い！」

気付けば脚が動いていた。東京競馬場ならば走れば間に合う距離の筈だ。

私は、見に行かなければならない。彼女を応援しなければならない。

一生に一度の大舞台を駆ける彼女を見られるのは、一生に一度だけなのだから！

「はぁっ??はぁっ??!!」

運動不足と年齢が相まって、走り始めてすぐ苦しくなった。営業で歩き回ってるとはいえ、走るのとはわけが違う。だが??同時に、楽しかった。

子供の頃の、怖いものなんて何も無い、自分が無敵なのだと思って

いたあの幼い日々を思い出す。ネクタイを外し、鞄を小脇に抱えながらただ走る。

１５時２８分――――東京競馬場が見えてきた頃には、場内の歓声が僅かに耳に入ってきた。彼女の夢が、始まってしまう。見たい。絶対に見たい。彼女の姿を。あの努力家で、感動屋で、夢追い人の彼女の姿を。

１５時３１分――――東京競馬場に入った頃には、既にレースは始まっていた。

「お父さん!?」

「はぁっ?!はぁっ?!!遅くなった??レース、レースは??!?」

「最後の――――」

『さぁ、第４コーナーカーブした直線に入ってくる！先頭はアンバーライオン!!』

娘の声をかき消すように、実況と場内の怒号にも聞き間違えられそうな爆発的な歓声が響き渡る。

残り４００ｍ――――先頭集団を駆け抜けるウマ娘の中に、彼女は居た。

別人だった。

あの天真爛漫な笑顔は無く。

私の話に大泣きしていた泣き顔でも無く。

必死の形相で歯を食いしばり、流れる汗を拭うこと無く、それでもゴール目指して夢を駆ける一人のウマ娘。

目頭が熱くなった。

胸の内に何かが滾った。

実況の声なんて耳にも入らない。

――――走れ。

少しでも??ほんの少しでもいい。前へ。彼女の側へ。

――――走れっ。

夢を、見せてくれ。

「行けぇぇぇぇぇぇっ!!走れぇぇぇぇぇぇッ!!!!」

一瞬だった。
初めからではなかった。
それでも、私は確かに見たんだ。

一人のウマ娘が、夢を叶えたその瞬間を。

「あの子なんだ??。」
「えっ？」
「お父さんにチケットをくれたのは、あの1着の子なんだ。名前??分かるかな？」

下を向き、そう言った私に対して、娘はクスリと笑いながら言った。

「ウイニングチケット、だよ。」
「そうか??そう、か??。」

勝者を称える大歓声。
手を振るあの子と、空を舞う沢山のチケット。
『チケゾー』と誰もが称えるその会場で、夢の特急券を握りしめながら、私は涙を流し続けた。

んんｗ拙者、ど根嬢倶楽部会員Ｎｏ．１のサポカクソザコ侍にて候ｗｗｗ特別にキングコールをする権利を進呈するでござるブッフォｗｗｗ

第一印象は最悪だった。

そいつは、プライドが高すぎた。自分が誰より優れていると信じて疑わず、これと決めたら断固として譲らない。何をするにも上から目線で物を言う。スカウトに来たトレーナーだって、自分の理想と覚悟に釣り合わなければバッサリ切り捨てた。初めは、俺もその１人だった。

選抜レースの結果が良ければ話は別だったかもしれない。けれど、そいつは埋もれていった。どこか力みすぎな走りをし、”何か”を振り払おうと無我夢中で走っていたせいで自分の力を十分に発揮出来ず??ただ、レースを走り終えた。

それでも、そいつは言い続けた。

――私はキングヘイロー、一流のウマ娘よ！

誰もが困惑した。

現実を、自分の力を直視出来ないウマ娘だと、呆れていた。

一流を叫ぶ、口先だけの二流だと。

だからこそ、最悪な第一印象だった。

それを言い続ける事がどれだけ覚悟のいる事か、知らない連中からは。

その瞳の奥に宿る、決して消えない炎が見えない連中からは。

だからこそ、譲れなかった。

だからこそ、認めさせたかった。

だからこそ――。

『そして俺こそが、一流トレーナだ！』

誰にも渡したくないと、思った。

そこからはあっという間と言うもので、二人三脚でトゥインクル・シリーズを駆け抜ける日々が始まり、俺達は我武者羅にやってきたつもりだ。

日本総大将（スペシャルウィーク）が。
不死鳥（グラスワンダー）が。
異端の逃亡者（セイウンスカイ）が。
怪鳥（エルコンドルパサー）が。

同世代が次々と勝利を収めていく中、アイツだけは勝てない日々が続いた。意見の食い違いが起こった事など沢山ある。譲れないものの為に対立した事など、数え切れないほどある。

春も。夏も。秋も。冬も。トレーニング中も。トレーニング後も。レースの前も、後も??いつだって小競ってばかりの日々だった。

そうして迎えたあの日??6月7日の、東京優駿――。

『キングヘイロー14着!!どうした黄金世代、無念にも馬群へと沈んでいった!!』

前もって決めていた差しではなく、普段のレース展開からは考えられない、”逃げ”の強行策。元々先行策か差しでしかレースした事が無いアイツにとって、ぶっつけ本番??それも逃げの戦法など誰が見ても無理だった。スタミナが切れた所を他のウマ娘達に狙われ、馬群の並に飲まれていったのだ。

ターフから次々とウマ娘達が戻る中、アイツだけはただ一人、立っていた。

泥まみれの勝負服を払うこと無く。

雨にうたれる事を気にもとめず。

こちらに背を向け、拳を握りしめながら、ただ??立ち尽くしていた。

――キングは後退などしない。決して首を下げないの。
――私は一流のウマ娘、キングヘイローよ。こんな事で立ち止まったりしないわ！

レースが終わって、アイツはそう言った。ただ前だけを見据えて、絶対に涙を零すことなど無かった。俺が何を言っても、きっと聞きはしない。それは譲れない王の意地であり、曲げられない王のプライドであり、自分自身が決めた??王である為の絶対的な覚悟。

拳を握りしめ、震える声で強がりに満ちた高笑いをして、そうしてまた、俺の前を歩くのだ。

トレーナーは、ウマ娘と一心同体だ。勝てないのはウマ娘としての素質や血だけでは無い。どれだけ期待されたウマ娘がいようとも、その隣を歩くトレーナーが無能であれば勝ち続けることなんて出来やしない。

なのに――こいつは、キングヘイローは??決して俺を攻めようとはしなかった。決して、他のウマ娘を貶すような事は言わなかった。世間の標的だって、全てこの無謀な王ただ一人へと向けられた。

『??何焦ってんだよ。』
『焦る?このキングが?そんなはず、ないじゃない。』

立ち止まったキングヘイローの顔は見ずに、ただ前に立つ。あの日、自分が一流トレーナーだとほざいたのは俺だ。お前を独占したいが為に、覚悟があるなんて宣言したのは俺だ。

『一人でツッパんな。お前のトレーナーは俺だ。お前を勝たせてやれないのは俺の力不足だ。だからその?あぁー??だから??。』
『??だから、このキングの前を歩こうって?そんな権利、あげた覚えはないけれど?』
『権利なんか要らない。これは俺の??お前のトレーナーになった、俺自身の”義務”だ――キング??良く、頑張った。』

歩き出そうとした時、服の裾が掴まれた。
後ろから、たった一回??鼻をすする声がした。

それだけで、充分だった。

結局その後も子供の喧嘩みたいな小競り合いは続いたし、レースだって勝ったり負けたりの日々を繰り返した。一時期学園側からも、同世代に比べて戦績の残せていないコイツとの契約解除の話すら話題に上がった。

けれども――もう、立ち止まらない。迷わない。

何度泥に塗れようと。

何度敗北の味を噛み締めようとも。

後が無い、崖っぷちに立たされようとも。

俺達は、二人で宣言した。

必ず、有馬記念で勝つと。

◇◆◇◆◇

『第3コーナー曲がりまして先頭は変わらずセイウンスカイ。その後をエルコンドルパサーが続いていく。グラスワンダー、スペシャルウィークは機会を伺っているかまだ出てこない。2馬身離れてキングヘイローここに居た。』

雨の中山。年末最後の有馬記念は、悪天候をものともしない熱気に包まれていた。黄金世代と呼ばれるウマ娘達が一堂に会し、その頂を掴もうとしてれば当然だろう。序盤から展開が大きく変わる事は無く、彼女等は声援を背に受けながら走っている。

キングヘイローは人気こそ他の同期に比べれば低かったが、それでも会場からは確かにアイツの名前を呼ぶ歓声も聞こえてくる。独りよがりかもしれないが、それだけで胸が熱くなった。自分達がしてきた事が間違いじゃないと思えた気がした。

王は、一日にして在らず。

嘗てアイツに掛けた言葉が、頭の中で反芻される。

聞こえるか、キング。お前を呼ぶ声が。
見えるか、キング。お前が進むべき道が。
何度も何度も、何度だって負けてきた。
それでも歯を食いしばって、立ち上がってきたのがお前だ。

緑の勝負服、不屈の塊。
血統を証明する為の戦い。

『第４コーナー、ここでグラスワンダーがセイウンスカイを交わす！スペシャルウィークとエルコンドルパサーもセイウンスカイに並ぶか――――おっとここでもう１人、外からウマ娘がもう１人!!』

先頭を行く黄金世代の面々が、確かに笑った。

もし。
もしも、たった１人だけ――――頂を掴めるのなら。
一日だけでも、アイツが王になれるのなら――――それは今日、この時だ。

「撫で切れぇ!!キングヘイローッ!!!!」
『キングヘイローがグラスワンダーに並んだか！残り２００メートル、グラスワンダー粘る粘る！最終直線の大接戦、どっちだ！どっちだ！キングヘイローッ!!キングヘイローが差し切ったッ!!』

大歓声が巻き起こる中??こちらを向いた、不屈の王が、力強く己の拳を掲げた。

『１着はキングヘイロー！１７人の優駿達を引き連れて、堂々たる王の凱旋だッ!!』

◇◆◇◆◇

「ちょっと、何らしくない変顔してるのよ。」
「は？普通の顔だが？寧ろお前の方が引き攣りスマイルなんだが??」
「はぁ？言うに事欠いて、このキングが引き攣ってるですって??」
「ええしてます絶対してます、今おもしろい顔してます～！」
「その言葉そっくりそのまま返してあげるわよ鏡でも見たらどうかしら～！」
　レース後の控え室、互いに頬を抓るトレーナーとウマ娘。結局いつになっても、こんなやり取りは変わらない。
　まぁ??違うところと言えば、1人は泥まみれで全身びっちょびちょ。1人は泣き腫らして顔面びっちょびちょという所だろうか。
「大体、このキングが1番を取ってきたんだから労いの1つでもしなさいよへっぽこ！泣き虫！」
「誰がへっぽこで泣き虫じゃい！じゃあ何だハグでもしてやろうか!!」
「へっ!?」
　素っ頓狂な声を出し、キングヘイローは耳がピンと立った。??なんだその反応。完全に予想外である。もっと軽く、『馬鹿じゃないの！』ぐらいしてくるかと思ったのに??おい、なんでちょっともじついてる。なんでちょっと控え目に両手を広げてる。言ったこっちが恥ずかしく??いや、まぁ、うん。
「??お疲れ？キング。」
「??ええ。」
　抱き締めた彼女の体は、その衣服の冷たさを感じない程に火照っていた。走り終えた後だからだろうか。年相応な人間の少女と変わらない体に、多くの力と夢を乗せて、ウマ娘達は走っている。
　自分の背中に手を回してくるコイツもその1人だ。それがどうしてか、とても愛おしくすら思え――――。
「キングちゃん、トレーナーさんとぎゅーってしてる!!大人だねぇ～!!」

???????
ん？
「ち、ちょっとウララ！今いい所だから邪魔しちゃダメだって!!」
ん？ん??何故セイウンスカイの声がするのか。何故応援席にいた筈のハルウララの声がするのか。チラリとドアの方を見てみれば、なんと黄金世代と一緒にハルウララ。控え室にも春がやってきましたってか、やかましわ。
「あ、すみません！どうぞ続けてもらって大丈夫です！」
スペシャルウィークさんや、何を期待している。続きってなんだ。人参どっから持ってきたの??
他の同世代も各々方どうにも楽しそうな反応じゃあないですか。
気まず。
「????。」
ほれ見ろ。うちのキングの体温が上昇しているじゃないか。心做しか、背中に回ってる腕の力もどんどん強く??お？。
「お、おい、キング。力ッ？力強?!」
「???わ。」
「お”お”お”お”お”お”お”お”ッ！ベアハッグ!!キングッ！おい聞こえてんだろ、あんぽんたんッ！スットコドッコイ!!む”ん”む”ん”ッ!!」
「見世物じゃあ、ありませんわぁッ!!!!」
次の瞬間には、身体が無重力を感じていた??俺は、今宙を舞っているのだ。
そう言えばウマ娘って、１００キロくらいのバーベル平気で持ち上げるんだよな。おいおい、死んだわ。
「ぐぇ”ッ!!!!」
「ケッ!?」
「キング～、投げはマズイよ。」
「あらあら??トレーナーさんも楽ではありませんね？」

「お前??ホント覚えてろ、畜生??。」
控え室で起きるのは、小さな笑い声。誰から発せられたそれは波紋となって、やがて大きな笑いに変わっていく。
此方に背を向けたキングヘイローの、鏡越しに映ったその顔に浮かんだ笑みを??俺は忘れはしないだろう。
今日というこの日も??自分達がしてきた事の全ても――――決して。

それはそれとして、二度とハグはしてやらんがなッ!!!!

Ｄｒｅａｍｅｒ×Ｄｒｅａｍｅｒ　（１／２）

「しかし、存外馬鹿には出来ないもんだねェ」
　紅茶の入ったティーカップを口へ運びながら、アグネスタキオンはそう言った。その眼は何かを企んでいるようで、目の前に居るウマ娘をからかっているだけの様にも感じられる。僅かに眉間に皺を寄せながらも、視線を向けられている当人、マンハッタンカフェは何も答えなかった。彼女がこういう眼をする時、決まって自分が割に合わない思いをする事を、カフェは身を持って知っているからだ。
　そんなカフェの反応を意にも介さず、タキオンは淡々と話を続けていく。
「夢と言うのは、自分の中に抑圧された欲望や潜在意識を何らかの形で見るものらしい。一見何の関係も無い支離滅裂な内容であれ、そこには意味がある。無自覚の意識の奥底に仕舞われた自分自身が見えるのかもね」
「??何の話ですか」
「ふふっ、随分とご機嫌なようだが??余程良い夢を見たのかい？」
　先程とは違い、カフェは露骨に怪訝な顔をした。
　高笑いをしながら、タキオンはティーカップを置き、自らの実験スペースへと戻っていく。
　様々な色の薬品が染みた白衣がご機嫌に揺れている。こちらに背を向けながら黙々と作業を続けるタキオンの背を見ながら、カフェは薄ぼんやりとした頭で今朝の夢を浮かべていた。
　欲望――――懐かしい過去の出来事を夢として見た場合、そこに自らの欲し、望んだ思いがあるものなのか。
「トレーナー君」
　カップを持っていたカフェの手が止まった。
「図星かい？」
「???」
「もし君がそんな風にご機嫌になれるとしたら、君にしか見えない”お友だち”かとも思ったが??ココ最近の君を見てると、恐らくはこっ

ちかと思ってねェ」
「――だったら??」
タキオンと視線が合い、カフェの言葉は止まった。
また??あの眼だ。
からかっている。探っている。そう見せ掛けておきながら、その奥底では何を考えているか分からない科学者の眼。レースにおいて未だ、アグネスタキオンというウマ娘を超えられた事は無い。スピードの限界、その果て??そんな自分の欲望で満たされている筈なのに、どうしてか美しいとすら思えるその眼は、決して潰えぬ輝きを放ったまま最初にゴール板を駆け抜ける。
そうして何度も敗北を喫してきた。自分にしか見えない彼女(夢)にも、誰の目にも映る超光速の粒子(現実)にも。
「実は、モル?トレーナー君にも一つ心配事をされていてねェ。妹??つまりは、君のトレーナーという訳だが。新人でありながら、マンハッタンカフェという可能性に満ちたウマ娘のトレーナーとしてやって行けるのかどうか??君を君らしく、正しく導けるのかと」
カフェは、黙ってタキオンを見ていた。
「君にもあるのだろう?見たい景色。追いつき、越していきたい者。或いはそうして手にした〝夢の果て〟。それが君の言う〝お友だち〟であれ、私であれ??それを君は見れるのかい?あの気弱な彼女の元で。必要ならばこちらで――ふふっ、いや??忘れてくれ」
「??そうですか。では??今日はもう、失礼します」
いつの間にか空になっていたカップを残し、カフェは部屋を後にした。
「否定。賛同。共感。葛藤。選択肢は幾らでもあった筈。だが?真っ先に向けるものが〝怒り〟とはねェ。君は、君の思っている以上に自分のトレーナーに依存しているぞ、カフェ」
静かに独りごちる彼女は、僅かに口角を上げ、自嘲気味に言葉を吐いた。

「人の事は言えないけどね」

　それからすぐに部屋の扉が開き、彼女のトレーナーが入ってきた。妹であるカフェのトレーナーと今後の予定やトレーニングの方針を話し終え戻ってきたのである。その顔は僅かに疲弊しているようにも見えたが、タキオンを見るなり普段の顔つきに戻っていた。

「タキオン。次のレースなんだけど、このまま菊花賞に出て三冠を狙おうかと思う」

「あぁ、構わないよ。彼女も出場するだろうしね」

「??カフェに何言ったの？凄い剣幕だったよ？」

「なぁに、君の心配事を代わりに聞いてやっただけさ」

「えっ!?はぁ??それで貴方までカフェとギクシャクしたら元も子も無いわよ」

「しないさ」

　トレーナーの心配を他所に、即答した彼女の表情はどこか嬉しげであった。

「あぁ、しないとも。〝目は口ほどに物を言う〟。君は見たかい？ずっとこちらを見つめながら、明確なまでの敵対心を滾らせていたあの凄まじい双眸を。彼女が望んでいるのは、私達が立つべき舞台での戦い？そして自分達の証明さ。もし関係が変わるような事があるなら、もっと前から変わっているよ」

「自覚はあるんだ」

「ハハハッ!!きっと強いぞ」

「随分と嬉しそうなんだね」

「感情が身体にもたらす影響、言葉や既存の原理で証明し難い〝力〟と言うものは、まだまだ未知数なんだ。それを証明してくれるのであればこちらも願ったりなんだよ。ましてや気心の知れた彼女ならね」

　冷めてしまった紅茶に口をつけて、タキオンはトレーナーの方を見た。それは今日初めて彼女が見せた、信頼の眼差し。

「それに??私達なら勝つだろう？」

「当然。果てはまだ、ここじゃないからね」
戦い(菊花賞)の日は、確かに近づいていた。

Ｄｒｅａｍｅｒ×Ｄｒｅａｍｅｒ　（２／２）

『スパートを早める??ですか?』

菊花賞のひと月前。トレーナー室では、カフェと彼女のトレーナーが話し合いをしていた。目にクマを作りながら膨大な資料を手に、トレーナーは静かに頷く。

『アグネスタキオンさんは、今までのレースで足を休めるタイミングがほぼ同じなんです。第3コーナーと最終コーナー??今回に関しては、もう少し回数が増えるかもしれませんけど??』

『脚、ですか?』

『はい。脚の様子を伺いながら都度ペース配分をし、同時にレースを自分に有利な状況へと変える??並大抵の事じゃありません。姉さんの指示があったとしても、それをこなせるのは彼女が”異質”なウマ娘だからだと思います』

レース場を元にしたミニモデルに、トレーナーは2つの駒を置く。

『カフェさんはどれだけレースが乱されても、最後のスパートに向けてじっと耐えて下さい。タキオンさんのラストスパート、その3秒から5秒前。そこが貴方のスタート地点です』

そこまで言って、トレーナーはカフェの顔をバツの悪そうに見つめる。申し訳なさと、自分の力不足を訴えたその眼を、カフェはじっと見つめていた。

『あの人相手に、こんなめちゃくちゃな案で挑むのは難しい事だと思います。その分カフェさんには負担がかかりますし? 何よりまともな策とは言えません??ごめんなさい??』

疲れきった顔が全てを物語っている。口には出さないが、本来まともにやって勝てるような相手では無い事はどちらも知っていた。それ程迄に、アグネスタキオンというウマ娘は次元が違ったのだ。弱くなった脚というハンデを貰い、トレーナーとウマ娘が考えられる全ての手を打って、ようやく勝負になる。

マンハッタンカフェは知っている。タキオンが、あの皇帝と1度だけ戦った事を。生徒と生徒会長では無く、1人のウマ娘としてシンボ

リルドルフに”本気”を出させた事。
そんな相手に惜敗しようものなら、まず悔しさの前に喜んでしまうだろう。普通のウマ娘なら尚更そうだ。
それでもアグネスタキオンは立ち止まらなかった。喜びもしなければ悔しがりもしない。自分の夢を叶えるために、自身に魅せられたトレーナーと契約を結び、これから最後の走りをしようとしている。
実験――――何度そういう名目で振り回された事か。
マンハッタンカフェは知っている。自分のトレーナーが力不足だと言われたと言われたあの日、タキオンがわざとそうした挑発をしたことを。彼女は自分に何かを期待している。度々口にしていた『プランB』が何かは分からなくとも、タキオンの眼には焦燥と迷いがあった。すぐにでも、自分の力を引き出してもらわなければならない理由があったのだろう。
『トレーナーさん⁇私は、貴方に無理を言いました。勝てないはずのレースで、勝たせてくれと言ったのは私です。だから⁇貴方が悪いわけじゃありません⁇』

自身がいつだったか夢に見た、トレーナーとの出会いの夢。
彼女の前にも、多くの中堅やベテラントレーナーがカフェに声をかけた。そのどれもを、彼女は断り続けた。明確に何か気に入らなかったのではない。その言葉のどれもが彼女のレース結果を認めるばかりで、マンハッタンカフェというウマ娘にさほど興味が無いようにも感じられたからだ。
最後に来た新人トレーナーは、酷く気弱だった。自分の力のなさを痛感し、それでも尚カフェが良いのだと言ってきた。最初は断るつもりだったが、トレーナーの眼は僅かにカフェからズレていた。自分にしか見えない筈の”彼女”をしっかりと追っていたのだ。
だから選んだ。自分だけでなく、”あの子”の事まで分かってくれるこの人なら。そうして手を取って、自分はここに居る。
その人に恩を返すのならば。
自身の追い求める夢を叶えるのなら。

アグネスタキオンというウマ娘が見る、果てと対峙するというのなら。

――私は??やる事をやるだけです。

カフェは、そう誓った。

◇◆◇◆◇

『向正面回りまして、先頭から3馬身離れて3番手の位置、1番人気アグネスタキオン。3番人気マンハッタンカフェは後方から5番手の位置に居ます。どちらも得意な位置で展開を伺っています』

菊花賞は３２００ｍの長丁場。クラシック路線の最後を飾るこの舞台では、スタミナ等の基礎的な能力に加えて、生まれ持った生粋のステイヤーとしての素質が如実に現れる。

マンハッタンカフェは馬群の中から僅かに外に出て、アグネスタキオンの位置を確認していた。

(??身体が少し上がった)

恐らくあれがタキオンのペース配分なのだろう。1度も速度を落とすことなく、息を整えている。他のウマ娘達もこの舞台で走れるだけの実力を確かに持っているが、タキオンのそれは天性の物だ。まだ余裕のある表情がそれを物語っている。

(今ここで息を抜いたなら??最終コーナーは中間で？いや、それなら初めに息を整えた方が最後のスパートを掛けやす――ッ!?)

『アグネスタキオンここで前に抜け出した！最終コーナーを前にして速度を上げていく!!余りにも早いスパートで他のウマ娘達を出し抜いた!!』

思考の最中、アグネスタキオンが動き出した。

予想外の展開に他のウマ娘達も掛かり気味に彼女の後を追って行

く。彼女と1度戦った者、或いは彼女の走りを知っているものは、離されまいと必死に食らいついていた。
――違う?あれは、スパートなんかじゃ??っ！
カフェは、悔しさから歯を食いしばった。
遠目に僅かに見えた自分のトレーナーの顔が酷く青ざめている。レースにおいて絶対は無い??それは分かっていたのに、いざ目の前に現れた壁は余りにも高かった。
展開を見て、馬群に飲まれないよう頭を使い続けて、攻めの機会が近づいてきたと言うのに??タキオンは、ようやくいつも通りの走りを始めた。誰よりも彼女の近くに居た自分だからこそ分かる、タキオンの地ヂカラ。自分のペースを変えること無く、レースを激しく掻き乱し、そうして誰も彼もがバテ始めた時には、光の速さで駆け抜ける。
(これ以上離されたら??きっと、追いつけない。私とあの人が、こんなにも??ッ)
カフェは差し切りの体制に入り、止むを得ずスパートを掛けた。タキオンがここで動いた事により、彼女を超えるには必然的に2度目のスパートを仕掛けるしかない。
勝負は、タキオンが見せる一瞬の溜め。
疲弊した体に鞭を打ち、目まぐるしく展開が変わるレースの中で、カフェは頭を使い続けた。そうしてる間にも、白い勝負服は誰よりも先に最終コーナーに差し掛かる。
(今のあの人なら??どうする?どこで掛ける?考えなくちゃ、ダメッ?!!)
焦燥と、分が悪過ぎる賭けによる恐怖心。３２００ｍという距離は、確実にカフェの体力と精神を蝕んでいた。もしここでアグネスタキオンの全てを許してしまえば、彼女は誰に触れられる事もなく三冠を手にするだろう???自身の脚と引き換えに。
それを止める為に、自分は走っている。
勝ちたい。勝たなくちゃいけない。トレーナーさんと、約束したから?!

『カフェ。君と私は、存外似たもの同士なのかもね』

ふと頭をよぎったそれは、昔タキオンが言った何気ない言葉だった。深い意味は無いと思っていた言葉。かつての自分が否定した言葉。

けれど――――。

「??私なら」

小さく呟く。

マンハッタンカフェに良く似た誰かの影が、彼女の体に重なった。

後方から5番手の漆黒の勝負服。

彼女は、もうそこには居なかった。

◇◆◇◆◇

（ふぅン??まだ?来ないのか）

あれ程雑多に響き渡っていた歓声も、足音も??全てが遠く感じる。先頭で走り続けるアグネスタキオンは、1人きりだった。

いつもならとっくに後ろに着いてきた筈のマンハッタンカフェの姿も、今日は見当たらない。感情がどれだけ身体に影響を及ぼすのか期待していたが、これでは??タキオンは半ば諦めかけていた。

いつからだったろう――――自分の限界を知りたいと思ったのは。

いつからだったろう――――スピードの果てにある景色を見たいと思ったのは。

昔の事はよく覚えていない。気づいた時にはマンハッタンカフェという気難しい友人が居て、自分と同じものを見たいと隣を歩くトレーナーがいた。過去は??囚われ続ければ、いつか足元を掬われる。”もしも”があった時、きっと後ろ髪引かれる思いをする事にな

る。
だから全てを置き去りにした。振り返っても見つけられないぐらい、急ぎ足で駆け抜けたのだ。
（ハハッ、なんだ、意外と持ってくれるじゃあないか??）
心配だった自分の足は、僅かに痛むものの動いてくれる。スタミナにもまだ余力がある。
――キミが来ないのなら。
僅かにペースを上げる。静寂に包まれた世界の中で、彼女はターフを踏みしめる。
その表情は、どこか寂しげでもあった。
だが、もう止まらない。止められない。
三冠??それそのものに興味はあまり無い。例え自分の脚が終わろうとも、ウマ娘の、超光速（自分自身）が辿り着ける限界の果てを見る為ならば。
最終コーナー終盤に息を整えた彼女は、直線に入る僅かな瞬間に力強くターフを踏みしめた。
スパート??正真正銘の、ラストスパートを。

「ッ???!」

――空気が変わった？
後方、何馬身離れているのか分からない程向こう側??伝わってくるのは背筋を伝う言い様の無い痺れと熱。
感覚が極限まで研ぎ澄まされたタキオンの耳は聞き漏らさなかった。よく知っている筈の声が出した、スパートの息継ぎ（ブレス）を。ターフを抉り、弾ける土の音を。風を切り裂き、靡き、自身へと迫る漆黒の影を。
（全く、待ちくたびれたよ??そこに居るんだろう？）
心の中で問いかける。
ジリジリとした熱気と、突き刺さるような闘志は確実に近づいてい

る。

（君の目に映るのはなんだ？夢か？現実か？お友だちか？或いは??いや。そのどれに当たるとしても、だ）

アグネスタキオンは踏み出す。とうに限界を迎えていた筈の足を前に出し、我武者羅に手を振り続けてはひた走る。

――諦めが悪いねェ??君も、私も。

ほくそ笑みながら、僅かに後ろを振り向く。

限界間近で顔を歪ませながら、それでも消えない闘志を宿した金色の双眸が、すぐそこにあった。

（追い求めた限界の果て？スピードの向こう側へ??ッ！）

１／２馬身、上がり３ハロン。（残り６００ｍ）

「共に来たまえよ！マンハッタンカフェッ!!」

「アグネス、タキオンッ!!」

同時に掛けられたラストスパートに、レース場は爆発的な歓声に包まれる。何も知らない観客からすれば、２人のウマ娘が同時に２度目のスパートを掛けたようなものだ。

怒号にも似たそれは、しかし確かな声援であり、歓喜でもあった。

『内からアグネス、外からマンハッタン！マンハッタンカフェが猛烈な勢いで超光速に追い縋る!!しかし１／２馬身が縮まらないマンハッタンカフェ、このままアグネスタキオン三冠なるか!?』

３２００ｍという長丁場で、散々ペースを乱した後で、アグネスタキオンと言う”異質”を相手にしても尚、２度目のスパートという賭けに出て迫って来る。

タキオンは確信していた。それがマンハッタンカフェの持つ意志の力であり、彼女こそが紛れも無く自分に一番近い存在であると。だ

からこそ、頬が緩む。自分が持ちえなかった何もかもを総動員して、次から次へとこうして近くでその力の有り様を見せつけてくれるのだ。
(だが??まだ譲らない！君がトリガーなんだ。私は、今この瞬間にこそ、私の限界を越えられる！果てを、夢をッ――――)
ギラギラとした眼で直前に迫ったゴール板を目にした時、タキオンは自分を抜き去った影を見た。
マンハッタンカフェによく似たその影は、しかしカフェでは無い。僅かに微笑んだ穏やかな顔をした、ウマ娘の影。そこに最後の力を振り絞り、短く唸りを上げたカフェの姿が重なった時、全てはようやく終わりを迎えた。
『マンハッタンカフェ、今1着でゴ――――ルッ!!』
それは、影が光を捉えた瞬間だった。

◇◆◇◆◇

「なぁカフェー、少しばかり良いだろう？」
「嫌です。自分で歩いて下さい」
「私にとっても予想外だったんだよ。それにここでまた酷使すれば、復帰が長くなるじゃないかー」
ウイニングライブも終わり、寮へと戻って来たタキオンとカフェは満身創痍だった。限界ギリギリまで脚を酷使したタキオンはよろめきながら歩き、文字通り全てを出し尽くしたカフェもまた疲労と眠気に襲われていた。そんなカフェにタキオンがおんぶをせがむものだから、カフェとしてもたまったものでは無い。
「同室のデジタルさんがいるでしょう」
「出来ると思うかい？」

『タキオンさんをおんぶッ!!???そんな、私なんがタキオンさんの、ウマ娘ちゃん達の体に触れ、だ、だめ、そんな事許されなあぁでもタキオンしゃんが困ってるなら――――ごめんなさいやっぱり無理でしゅデジたん死んじゃうぅ♡♡♡』

カフェは、考えるのをやめた。

深い溜息を吐きながら、仕方なくタキオンをおぶる。

「ふふ、助かるよ」

タキオンの言葉に返事を返さず、カフェは歩き出した。校門を抜け、中庭まで差し掛かった時、タキオンに中庭へ向かって欲しいと頼まれたカフェは、重い足取りで切り株がある方へと向かった。

２人で座り、少しの間続いた沈黙を破ったのはタキオンだった。

「君が今日勝ったのは、やはりトレーナー君を馬鹿にされたからかい？」

「何の??話ですか？」

「君はあの日、怒っただろう。そして今日、その力を見せてくれた。走りながらも、君を必死に応援していた彼女の声が聞こえたよ。私は耳が良いからねェ??私としても、非常に興味深いものが見れた――――」

「だったら」

タキオンの言葉を遮り、カフェは彼女の耳をがっしり掴んだ。

「わひゃっ!?か、カフェ！耳は止めておくれよ！」

「その良く聞こえる耳で聴いて下さい。私があの日怒ったのは、トレーナーさんをどうこう言われたからじゃありません。力不足なのは、私達がよく知っています。けど??あの日、貴方は決めたんでしょう？自分の終わりを」

カフェの眼には、自分の困惑した顔が映っている。カフェがどこまで知っているのか、何故そこに怒る理由があるのか、タキオンは分からなかった。

「散々人を実験に巻き込んでおいて、貴方は先に行こうとした。私が？まだ貴方にも〝あの子〟にも追いつけていないのに。期待するだ

けしておいて、力不足なのが分かったらそうして切り捨てるような真似？怒っても、良いでしょう???」
　月明かりに照らされた彼女の目尻には、涙が溜まっていた。
「貴方を1人で先になんか行かせません。私の夢が叶うまで、貴方には『こっち』に居てもらいます。もし勝手な事をしたら、今日みたいに連れ戻しますから」
「キミは??それを言う為に、走ったと？トレーナー君では無く、私の為に？」
「??いいえ。私の夢の為です」
　僅かに間が空いたカフェの返答に、タキオンはいつだか自分のトレーナーに向けた穏やかな笑を零した。
「??そうか。すまなかったよ、カフェ。今度からは君に一言言ってから無理をするとしよう！」
「違っ、そんな無理はしないでって？っ！」
「あぁ、冗談だとも」
　ケラケラと笑うタキオンにもう一度深く溜息を吐いたカフェは、トレーナーに渡された二本の水筒を取り出した。
「おや、遅いティータイムかい？」
「トレーナーさんからです??」
　カップを渡されたタキオンは口にするなり苦虫を噛み潰したような顔になった。
「??珈琲を私に入れてくれたのは、意趣返しかい？」
「??どっちに何が入ってるか聞いてなかっただけです」
　ふぅン??聞いてない、ねぇ？。
　タキオンは、『紅茶』『珈琲』と大きく書かれたラベルを見やったが、何も言わなかった。カフェの顔を見ると同じ様に渋い顔をしている為、思わず笑ってしまう。
「なぁカフェ、交換しないかい？お互い疲れた時には好きなものでゆっくり休息をしたいだろう」
「???」
　何も言わずカフェは自身のカップを差し出した。タキオンが普段

口にしている、砂糖がふんだんに入った甘い紅茶。
「なぁカフェ――――」
キミは、最初から??そう聞こうとしたタキオンだったが、僅かに自分に体重を掛けたカフェの様子を見て口を閉じた。
変わりに出たのは、いつか聞こうと思っていた懐かしい話。
「君がいつだか見た夢の話を聞かせておくれよ」
「??何の実験ですか?」
「違うさ。私が、個人的に君に興味を持った??それじゃあダメかい?」
少し黙っていたカフェが、眠そうに口を開く。

互いに身を寄せ、他愛も無い会話をする二人の時間は、寮長に見つかるまで静かに続いていった。

ゴル＆マック～空飛ぶ屋形船と消えた１２０億を追え!!～

「あら、トレーナーさん。おはようございます」
朝、メジロマックイーンの様子がどこか楽しげだったのでどうしたのかと話を聞いてみた。
「えぇ??実はゴールドシップさんが私に見せたいものがあると仰っていたもので」
ほほぅ、成程。
うちのチーム内でもことある事にメジロマックイーンに絡むゴールドシップだが、なんだかんだ付き合うマックイーンも彼女にはどこか思う所があるのだろう。マックイーンがゴルシに本気で怒っていたのは、春天後に食べる筈だった限定プリンを食べられた時、それから爺ちゃんちの懐かしい畳の匂いがすると言われていた時ぐらいだ。
「ですがトレーナーさんもお優しいんですね。わざわざあの人にトレーナー室の一角を貸してあげるだなんて??」
――――――????
「何ですのその反応?何故、そんな事した覚えがないとでも言うような顔を?」
そうは言われても本気で覚えが無いのだ。果たして自分はそんな約束などをしたのだろうか。
こちらの反応を見るや血相を変えたマックイーンは俺の手を取り、一目散へとトレーナー室に向かった。
「ゴールドシップさんッ!?貴方また私を――――」
マックイーンが蹴破ったドアの向こうにはトレーナー室???が、あったはずなのだが。
「おぅ、おせーぞマックイーン!!」
辺り一面砂まみれ。美しい日本の原風景足り得る波模様。

つまり、トレーナー室は枯山水になっていた。
意味が分からない？俺も分からない。まぁ??ゴルシだし。
「あ、貴方??何してますの!?」
「見りゃ分かんだろ？ゴルゴル星と交信するためにメッセージ送ってんだよ」
しかも間違ってる。
「だからって部屋中こんなに砂まみれにして！」
「まぁ細かい事はいーじゃねぇか！」
「良くありません！トレーナーさんも何か言ってあげてください!!??トレーナーさん？」
枯山水??一般的に有名なのは、京都にある龍安寺だろう。幼い頃に1度見たきりだが、その美しさにはえもいえぬ魅力があった。京都を代表する観光名所の1つとしても挙げられてもおかしくない。そう、京都の――京都？
京都と言えば??天皇賞・春。
はっ！もしやゴールドシップは、春天2連覇のマックイーンの精神を和らげるためにこうして用意したのではないか!?いや、マックイーンが好きなゴールドシップの事だ。
これはメジロマックイーンのトレーニングにも活かせるかもしれない!!

器用さが１０上がった。
芸術性が１０上がった。
『枯山水のコツ』のヒントレベルが3上がった。

「トレーナーさん、何か言って？ひっ、な、何ですのその微笑みは!?要りません！そんなコツ要りませんからっ!!絶対に受け取りませんわよッ!!!!」

『さぁ始まりました根岸ステークス。出場ウマ娘たちも気合が入ってますが、やはり1番注目を集めているのはこの子でしょう』

『そうですねぇ?まさかメジロマックイーンがダートレースに出るとは思いませんでした。パドックで見せた枯山水はとても美しかったですね』
『厳しいレースになりそうですが期待したいところ??え?出走しないんですか?』
『何しに来たんでしょうね』

後日、3人まとめてエアグルーヴにこってり絞られた。

◇◆◇◆◇

「何でお前レース中に紅茶飲んでんの?」
「は?」
練習前のトレーナー室で、ゴルシがウマホを弄りながらそんな事を言った。
「幾ら私でも真剣勝負の最中にそんな事はしませんわ」
「いやこのゲーム見てみろって」
「ゲームって??何でレース中に紅茶飲んでるんですの?」
ゴルシの携帯画面を見ると、確かにマックイーンが紅茶を飲んでからラストスパートで速度を上げていた。と言うか、何故ゲームの中にマックイーンや他のウマ娘達がいるのか。また秋川理事長がポケットマネーでどうにかしたとしか思えないが??あの人ホントに財布の紐緩いな。
だがもしこれが本当に再現出来るのなら、ウチのマックイーンもレース中に紅茶をキメれば今より更に強く――
「やりませんわよ?」
??先手を打たれてしまった。
「またエアグルーヴさんに叱られたいのなら話は別ですけど。というか、貴方だってレース中に錨を振り回してるじゃないですか。」

「おう、めっちゃ早くなったぞ。」
「は？なん??は??」
「なんだなんだマックちゃん、今じゃレースでもそういう事するのが流行りなんだぜ？タイキは拳銃乱射してるしグラスは薙刀振り回して勝ってたじゃねーか！」
「えっ、いや、そんなわけ????そうなんですの??」
チラリとマックイーンが此方を見た。恐らく答えが欲しいのだろう。答えがあるかと言われればそんなものは無いし、あるとしてもNo以外有り得ない。だが??本当に良いのだろうか？まだ速さを出せる可能性を前にして、冒険する心を失ってしまっても。恐れを乗り越えてこそ、人は更なる進化を遂げられるものだ。
退かぬ。媚びぬ。省みぬ。
ねだるな、勝ち取れ。さすれば与えられん。
故に――――こくりと頷いた。
「そうですか？では私も??ってなるわけないでしょう!?何言ってるんですの!?」
ダメかー。

『天皇賞・春も最終コーナーに差しかかる！1番人気メジロマックイーン、見事2連覇を果たせるのか！おっとここでマックイーンがカップを取り出し――なに??』
『走りながら紅茶をキメてますねー。ほぼ顔に掛かっているので飲めているか些か不明ですが』
『マッ、マックイーンここで後続をどんどん突き放す！凄い脚だ！メジロマックイーン、天皇賞春悲願の二連覇達成っ!!』
『首から上が不良バ場ですね』
『は？』

後日、手から青い炎を出したエアグルーヴにしこたま怒鳴られた。
ゴルシは吊り下げられた。